

THE **A** MUSEUM

Vol.7-2 第20号 2012.9.11

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

特別展

職人の

—商品の誕生—

「わざ」と「カタ」

技

型

型を使った職人の技が集合!

平成24年

10月6日(土)▶

11月18日(日)

休館日:月曜日(10月8日は開館)

9:00~16:30 観覧受付は
16:00まで

料金 一般/600円 高校生・学生/300円

中学生以下と65歳以上の方
障害者手帳等をお持ちの方 / 無料



『今様職人尽歌合』より補造

「職人のわざ(技)」という言葉から皆さんはどのようなイメージを思い浮かべられるのでしょうか。おそらくは「長年の修業により会得した精緻な手わざ業」といった印象が強いのではないかと思います。また、技に誇りを持つ職人の気質として納得のいく仕事しかしない頑固者というイメージも強いのではないのでしょうか。確かにそのような一面もあ

りますが、一方で技で生計をたてるためには経済性も重要であり、職人は「規格のそろった製品(商品)を効率よく量産する技」の開発にも力を注いできました。その一つに「カタ(型)」を使ったものづくりがあります。

今回の特別展では、型を使った職人の技を中心に展示します。

特別展 「技」と「型」 職人の「わざ」と「かた」



「職人歌合帖」より大工と鍛冶屋（部分）
室町時代の製作とみられ、さまざまな職人の店先・
工房の姿が描かれています。

I 職人と「ものづくり」の発達

日本の職人研究に大きな功績を残した遠藤元男氏は、自ら会得した手工技術と道具を頼りに生計をたてるいわゆる「職人」が登場したのは、12世紀ころであるとし、それまで朝廷や豪族・貴族に従属していた工人や農民の中から独立して自分のもつ技術と道具によって生産・加工を行い、手間賃として収入を得る専門的な職人が生まれていったと述べています。当初は番匠（大工）・鍛冶・鋳物師・仏師などが誕生し、中世中期に至り様々な職人が生まれていきました。

中世の職人の姿を描いた代表的な資料に職人歌合があります。これは左右二組に分かれた様々な職人が歌を詠み比べる架空の歌合を描いたもので、鎌倉時代に描かれた「東北職人歌合」「鶴岡放生会職人歌合」、室町時代に描かれた「三十二番職人歌合」、「七十一番職人歌合」の4種が知られています。もともと、これらの歌合の序文をみると当時はまだ独立した手工業者たちのことを「職人」とは呼ばず、「道々の者」「諸職諸道」などと呼んでいました。やがて近世になると城下町などに手工業者たちが集まって生業を営むようになり、非血縁者にも技術を伝習するために徒弟制度が発達し、「仲間」と呼ばれる同業者の組織も生まれました。

17世紀ころにはこのような手工業者を総称して「職人」と呼ぶようになり、江戸幕府による「士

農工商」の身分制度の中で「工」に相当する位置づけがされるようになっていきます。

近世には各地で産業の振興が図られ、地勢的条件や自然環境等を生かした地場産業が発達していきます。また交通網の整備や貨幣経済の発達により、各地の名産物が商品として全国に流通するようになっていきます。

こうした経済の発展により、職人の生産様式も規格品を効率よく大量に生産することに重きが置かれるようになります。まだ蒸気機関や電力など動力のない当時、職人が商品を大量に生産するのを支えた方法には工程による分業化と作業の効率を高める道具「型」の使用がありました。



「今様職人尽歌合」より達磨師



張り子ダルマの木型

II 「型」が生み出す商品

職人が使用する型は、職種や製品により大きく異なります。ここではその一部を御紹介します。

張り子人形や張り子ダルマづくりでは製品と全く同じ形の型が用いられます。型の上に紙を貼り形が完成したら切り込みを入れて型を取り出します。

また、同じ玩具でも土人形や木目込人形では内部に粘土や桐粉などを詰めて作るための製品を反転させた凹型の型が使われており、和菓子の落雁などでも同様の木型が使われています。



和菓子（落雁）の木型

また、浴衣や半纏などの染めには和紙を柿渋で固めた型紙が使われ、精緻な意匠を実現しています。



藍染めの浴衣の型紙

桶作りでは、湾曲した側板をいくつも組み合わせ、丸い容器に仕上げます。側板のカーブは桶の大きさや種類によって全てことなるため、その微妙なカーブを整えるための型が用いられています。



桶作りの型と製品



Ⅲ 現代のものづくりに繋がる職人の技

幕末にわが国を訪れたアメリカの提督ペリーは、職人の「ものづくり」の現場を見て、「日本の手工業者は世界に於ける如何なる手工業者にも劣らず練達であつて、人民の発明力をもっと自由に発達させるなら日本人は最も成功している工業国民に何時までも劣ってはいないことだろう。日本人が一度文明世界の過去及び現在の技能を所有したならば、強力な競争者として、将来の機械工業の成功を目指す競争に加はるだらう」(*)と、その技術を高く評価しています。ペリーが目の当たりにした職人達は、手作業で精緻な製品をつくとともに、規格のそろった「商品」を大量に生産する「技」をもっていました。ペリーの予言通り、開国によって西欧の「動力」や「機械」を得た日本は、近代工業を目覚めしく発展させましたが、その礎には職人のものづくり（生産技術）があったのです。

今回の展示では「型」を使った職人のものづくりをテーマに、浴衣や和傘、和菓子あるいは瓦

など衣食住に関わる品々や、子どもの成長を祈願した雛人形や押絵羽子板、そして近代工業の発展に貢献した鋳物など、埼玉の職人が精根こめて作ったさまざまな製品を型や製作工程品とともに紹介します。また、比較資料として文明開化の窓口となった「横浜」の職人が使った「船の碇」や「赤い靴（西洋靴）」の木型なども紹介します。

熟練の「技」と使いこまれた「型」が織りなす職人の「ものづくり」の世界をお楽しみください。

(*) 引用：土屋喬雄・玉城 肇訳『ペルリ提督日本遠征記（四）』岩波文庫、1955年、pp.127-128

< 主な展示資料 >

- ・ 職人風俗図屏風（江戸時代中期頃・当館蔵）
- ・ 埼玉県内の型を使った職人の道具・工程品・製品
- ・ 神奈川県指定有形民俗文化財「神奈川県の職人の道具コレクション」（神奈川県立歴史博物館蔵）から型を使った職人の道具の資料
- ・ 石臼加工用具（厚木市郷土資料館蔵）
- ・ 横浜開港後の西洋靴等職人の製作用具・西洋船碇木型（横浜市技能文化会館蔵）など

< 主な関連事業 >

- (1) 記念講演会「ものづくりは楽しい～現代町工場のものづくり～」

講師：たなかじゅん氏（漫画家）

日時：10月28日（日）13:30～15:00

会場：当館講堂

内容：町工場を舞台にした漫画「ナッチャン」の作者が現代のものづくりの現場をわかりやすく解説します。

定員：150名（応募方法：10月10日までに往復はがき又は電子申請で申込）

- (2) 民俗工芸実演

① 「江戸木目込人形作り」

講師：岩槻人形協同組合

日時：11月10日（土）

11:00～12:00 と 13:30～15:00

② 「桶作り」

講師：伊藤風呂店

日時：11月11日（日）

11:00～12:00 と 13:30～15:00

①②とも会場エントランスホール、当日受付無料。

（展示担当 服部 武）

企画展 埼玉歴史街道Ⅰ

平成25年 1月2日 水 ~
2月11日 月・祝

—『新編武蔵風土記稿』の世界—

江戸時代の武蔵国を研究する際に欠くことのできない資料として『新編武蔵風土記稿』という地誌があります。この『新編武蔵風土記稿』は、文化年間^{はやしだいがくのかみ}に林大学頭^{ばくしんまみやしようごろう}を総裁として幕臣間宮庄五郎^{ことのが}士信^{ことのが}ほか41名が編纂に携わり、文政11(1828)年に全266巻が成稿、天保元(1830)年に上呈された「新編武蔵風土記」を基にしています。「新編武蔵風土記」は、幕府に上呈されただけではなく、武蔵国の各藩などにも所蔵されていたと考えられ、明治期には比企郡^{べんじょう}番匠村(現ときがわ町^{こむろげんちよう}番匠)の名士小室元長が埼玉県庁で所蔵している「新編武蔵風土記」を写本してほしいと願い出ており、実際に書写してもらっています(埼玉県立文書館寄託 小室家文書)。一方、大里郡青山村(現熊谷市青山)の名士根岸武香等は、「新編武蔵風土記稿」全266巻を出版することを決め、明治17(1884)年、80巻にまとめて出版しました。この段階で「新編武蔵風土記」に「稿」の字が追加され、『新編武蔵風土記稿』(以下、『風土記稿』と略す)となりました。この本はその表紙の色から「赤本」と呼ばれています。

今回の展示では『風土記稿』に図示、あるいは釈文や銘文が記載されている文化財や風景の中から現存している文化財や現況の風景写真、当館で所蔵する「赤本」に使用された図版版木などを展示します。また、『風土記稿』が成立するまでの過程や「新編武蔵風土記」がその後の地誌編纂に与えた影響、同時代の地誌類なども展示する予定です。



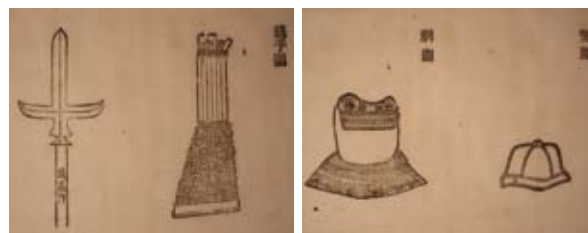
『風土記稿』(赤本)と収納箱

それでは、今回展示する資料の中から数点を紹介したいと思います。

繚糸威最上胴丸具足(埼玉県指定文化財、当館蔵)

古河公方足利政氏にゆかりの寺院である甘楽院(久喜市)に伝来した具足で、室町時代の末期から安土桃山時代にかけての時期に作成されました。金具には足利家の紋である桐紋が蒔絵で描かれています。埼玉県にかかわる数少ない中世の甲冑の中でも伝来が比較的明らかであり、地味な装飾性など形態的にも戦国武将の実戦用具足と考えられます。『風土記稿』では、足利政氏が幼年期に着用した具足であるとしています。

また、兜・胴・籠手などを個別に図示しています。



繚糸最上胴丸具足(右)と『風土記稿』に図示された具足(下、「赤本」69巻、左側の十字槍も現在、当館にて所蔵しています。)

椿文鎌倉彫笈(埼玉県指定文化財、個人蔵)

笈^{しゆげん}は修験者^{あんぎやそう}や行脚僧等が仏具や教典・生活用具等を納め、背負って歩くためのもので背負子を改良し、枠を組んで板をはり、背板に品物を縛りつけて檀板^{だんいた}でしめ、反対側に背負い紐をつけた板笈と縦長の四角い箱に短い4本足をつけた箱笈があります。この笈も箱笈で、正面は三段に分かれ、

各扉には椿の花の文様がレリーフ状に彫られており、その扉を押さえる板は下方から上方へ菊の花と枝葉が伸びています。いずれも鎌倉彫と呼ばれる技法で作られており、黒漆と朱漆を使い分け図像を華やかに見せています。『風土記稿』では足立郡大間木村（現さいたま市緑区大間木）の修験寺院三光院（現在は廃寺）の什物として図も載せていますが、現存する物とほとんど変わらず精巧な図です。



椿文鎌倉彫笈（右）と『風土記稿』に図示された笈（左、「赤本」48巻）

銅鐘（重要文化財、養寿院蔵、展示は複製品）

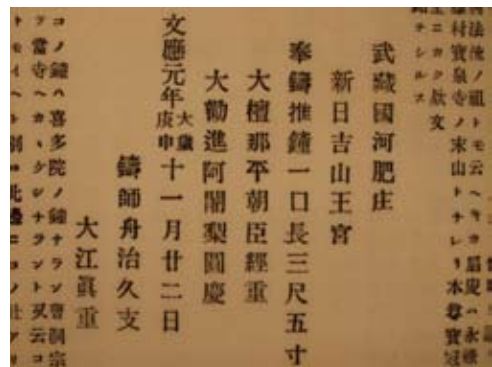
これは養寿院（川越市元町）の本堂内に懸架されている銅鐘で、池の間に陽刻された8行の銘文から鎌倉時代の文応元（1260）年、入間郡内の河肥庄（＝河越庄、現川越市付近）にある新日吉社に奉納するために鑄造されたものであることがわかります。その銘文の中に出てくる大檀那平朝臣経重は平安時代末期以来河越庄を本貫地として武蔵国を中心に勢力をふるった秩父平氏河越氏の嫡流として鎌倉幕府御家人となり、『吾妻鏡』などにも登場する人物です。また、鑄師丹治久友は物部氏と



ともに関東で活躍した河内出身の鑄物師で鎌倉市長谷の大異山高德院清浄泉寺にある阿弥陀如来像（国宝、通称「鎌倉大仏」）の鑄造に従事しているほどの当時一流の鑄物師でした。『風土記

銅鐘（重要文化財、養寿院蔵）

稿』では銅鐘の図はなく、銘文だけが掲載されています。



『風土記稿』に掲載された銘文（「赤本」48巻）

石戸蒲ザクラ（国天然記念物）

東光寺（北本市石戸宿）にあるエドヒガンザクラの一品種で、かつては日本5大サクラの一つとしてあげられていたサクラの大樹です。源頼朝の弟で遠江国蒲御厨（現静岡県浜松市）で生まれ育ったため蒲冠者と呼ばれた源範頼が植えたという伝承を持っているため蒲ザクラと呼ばれています。『風土記稿』では阿弥陀堂境内蒲桜図として俯瞰した風景図が載せられています。



石戸蒲ザクラ（平成13年4月撮影、上）と『風土記稿』の阿弥陀堂境内蒲桜図（下、「赤本」51巻）

（展示担当 渡 政和）

歴史のしおり 鉄のほどけさま

鉄はその鈍い黒さから、古くは「くろがね（黒金）」と称されました。「鉄の盾」、という言葉があるように、きわめて固く頑丈なもの、頼りになるものたともなります。

仏像の材質は木・土・石・金属などさまざまです。日本の仏像のほとんどは木彫像で、それに次ぐのが金銅仏、つまり銅製鍍金の像です。そして、数は少ないものの、なかには鉄でつくられた仏像もあります。

奈良時代、都の大寺院の主な仏像は、銅像や塑像、乾漆像でした。平安時代には、木彫像が仏像の主流となります。鎌倉時代に金属製の仏像が再び盛行します。多くは金銅仏ですが、現在の関東地方や愛知県など一部の地域で鉄仏が流行しました。

埼玉県内にも、鎌倉時代に制作された鉄仏が残っています。そのひとつが、当館に寄託されている「鉄造阿弥陀如来立像」（羽生市天宗寺蔵、以下「本像」）です。

本像と同じ型で造られたと思われる遺品が数点あります。そのうち、長野県の「鉄造阿弥陀如来立像」（八木虚空蔵堂蔵）は背面の銘文から建治元年（1275）に制作されたことがわかり、本像も同じ頃に制作されたと考えられます。

本像は、両肩と胸のあたりまでを覆う衣を着け、右手は胸の前まで上げ、左手は前方に下ろし、直立しています。手首の先や、光背・台座も残っていませんが、今残る形から、当時流行した善光寺式阿弥陀三尊の中尊であったと思われる。

善光寺式阿弥陀三尊とは、信州・善光寺本尊の姿を写したとされるもので、鎌倉時代以降、全国各地で盛んに制作されました。阿弥陀如来の脇に、勢至・観音菩薩が立ち、三尊を大きなひとつの光背が包む形式です。秘仏である善光寺の本尊は、日本に最初に伝わった仏像といわれ、中世にその信仰が広まりました。当時、関東の地で流行した鉄という特殊な材質で制作され、全国で広まった善光寺式阿弥陀三尊の形式を示す本像は、県内の造仏事情を示す貴重な像です。

鉄で仏像をつくるには困難が伴います。金属製の仏像は、材料を溶かして型に流し込み、冷却し固めてつくる、鑄造という加工方法をとります。

鉄は溶解に高温が必要で、鑄造には高い技術が求められ、そのうえ鑄造後の仕上げも難しい材質です。そのような鉄の仏像が、なぜつくられたのか。さまざまな解釈がありますが、戦乱の相次いだ時代を考慮して、鉄という堅牢な材質への信頼感によるものとする説があります。

鉄仏は、一般にその鑄肌はごつごつとして、仕上げの加工もほとんどなされていません。外型の継ぎ目に金属が流れてできたバリと呼ばれる突起部を、きれいに取り除くことが難しく、たいていは像の側面にそのまま残しています。鉄は、一度固まった後、手を加えて変形させるのは難しい材質なのです。しかし、銅と比べ火災に強いという利点はあります。

また、鑄肌の粗くなる鉄仏は、平安後期の東国で流行した、表面にノミ目を残す「鈍彫」と呼ばれる木彫像と、どことなく通じる趣があるように思います。このような一種の荒々しさを残す仕上げの像は、当時この土地に住んでいた人々の美意識に沿うものだったのではないのでしょうか。長い年月を経て表面が錆び、両手首の先を失った本像は、それでもなお、腹部の衣文の丁寧なつくりや、すっきりとした面貌に、当初の面影を残しています。（企画担当 内山美代子）



鉄造阿弥陀如来立像
（羽生市指定文化財、天宗寺蔵）

学芸員ノート 「復興」を描いた漫画家 麻生豊

当館が所蔵する資料「銀座復興絵巻」を描いた漫画家の麻生豊（1898-1961）は、代表作「ノンキナトウサン」（「ノントウ」）をはじめ、多くの新聞4コマ漫画を描き、活躍した漫画家です。1945年の敗戦後、空襲で焼け野原となった銀座の「復興」の過程を描いたのが「銀座復興絵巻」で、1946年から1957年までの20巻を当館が所蔵しています。

麻生は大阪府に生まれ、高等小学校を卒業後に上京し、漫画家の道を志します。日本人漫画家第一号と言われた北沢楽天（大宮生まれ）の漫画家養成塾「漫画好楽会」に入会、関東大震災の年、1923年に報知新聞に入社し漫画記者となります。

この年の6月、同紙に「ノントウ」の週1回の連載を開始します。団子鼻に丸眼鏡、紺の着物に羽織、帽子、下駄履きというスタイルの、頼りなさげな中年男性であるトウサンが主人公の物語です。震災後のある回（このときは6コマでした）は、昼食時に大地震に遭遇したトウサンが、倒壊した家の下敷きとなっても茶碗を離さないという話だったように、震災後には大地震の経験や「復興」の途上の東京に暮らす人々の日常生活がひんぱんに描かれました。

震災直後の11月に「ノントウ」は夕刊1面左上に4コマで毎日掲載の形式となります。震災前後は新聞が大衆化して読者層が広がり、新聞漫画が求められ、また毎日連載するための省力的な表現が模索された時代でした。4コマ漫画はそのために生まれたものといえます。麻生は4コマ漫画を描いた最初期の漫画家でした。

その後麻生は読売新聞、朝日新聞と移籍し、4コマ漫画を描き続けます。1929年に読売に連載

した「母アチャン」の第1回では、主人公母アチャンが転倒した衝撃を家族が地震と勘違いする話が描かれ、ここでも震災を意識していることが窺えます。また朝日新聞に連載した「只野凡児」では昭和恐慌による就職難の時代に生きる若者を描きます。麻生は、震災の悲惨さ、不況下の生活の過酷さといった時代背景のなかでの、人々のなごやかでおかしみのある日常生活を一貫して描き、一面殺伐とした社会にあつて、かえって読者に受け入れられ、好評を博しました。

敗戦の翌年の1946年には「銀座復興絵巻」を描きはじめます。新聞を舞台に活躍した麻生にとって、新聞社が集中し、彼の事務所もある銀座の街は庭のようなものです。それが灰となった虚脱感と焦燥感のなか、銀座のありのままの変化を記録し、「漫画家の私の生きた印」を残そうと決意したのです。

1946年の3巻では焼け跡のバラック、占領軍向けキャバレーと戦災孤児の対比、男女がともに参加するデモ、闇市など、戦後の明暗や混沌のなかにも活気ある街頭を描いています。最後の1巻である「銀座復興絵巻 昭和32年の1」（挿図）では、外堀の埋め立てと高速道路の建設、地下鉄丸ノ内線の西銀座駅延伸、晴海通りを埋める人ごみと交通渋滞など、開発著しい数寄屋橋交差点が描かれます。経済白書に「もはや戦後ではない」と記述された翌年の風景です。

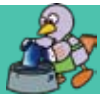
麻生は天災である震災をきっかけに漫画家として成功し、人災である戦災で被害を受けた「戦後」の銀座を描ききったという意味で、生涯災害からの「復興」のなかの人々を描いた人物といえます。

（資料調査・活用担当 佐藤美弥）



銀座復興絵巻 昭和32年の1（当館蔵）

THE A MUSEUM



歴史と民俗の博物館イベント情報(10月～2月)



埼玉県のマスコット
コウケン



■特別展「職人のわざとカター商品の誕生-」を、10月6日(土)から11月18日(日)まで開催いたします。

江戸木目込人形

国宝の公開

- ◆ 9月21日(金)～11月25日(日) 太刀(銘 景光 景政)短刀(銘 景光)
- ◆ 9月21日(金)～12月28日(金) 法華経一品経ほか(通称: 慈光寺経)

10月

- 6日(土) 特別展「職人のわざとカター商品の誕生-」オープン 特別体験事業「十二単・直衣の着装体験」 特別展展示解説、博物館裏方探検隊
- 13日(土) 博物館裏方探検隊
- 14日(日) 特別展展示解説
- 18日(木) 特別体験メニュー「江戸組紐ストラップ作り」
- 20日(土) ビデオ上映会「職人のものづくり」 博物館裏方探検隊
- 21日(日) 特別展展示解説・ミュージアムトーク
- 27日(土) 博物館裏方探検隊
- 28日(日) 特別展記念講演会「ものづくりは楽しい」

11月

- 1日(木) 特別展展示解説
- 3日(土・祝) ビデオ上映会「職人のものづくり」 博物館裏方探検隊
- 4日(日) 特別体験事業「お雛子体験教室」 特別展展示解説
- 10日(土) 民俗工芸実演「江戸木目込人形作り」 博物館裏方探検隊
- 11日(日) 民俗工芸実演「桶作り」
- 14日(水) 特別展展示解説
- 17日(土) 特別体験事業「十二単の着装体験」 博物館裏方探検隊
- 18日(日) 特別展「職人のわざとカター商品の誕生-」最終日 特別展展示解説・ミュージアムトーク

- 24日(土) 特別体験事業「火起こし体験教室」 博物館裏方探検隊

12月

- 1日(土) 博物館裏方探検隊
- 8日(土) 歴史民俗講座「古墳から出土した勾玉について」 博物館裏方探検隊
- 15日(土) 特別体験メニュー「ミニ銅鏡作り」 博物館裏方探検隊
- 17日(月)・18日(火) 館内消毒のため臨時休館
- 22日(土) 博物館裏方探検隊
- 23日(日) ミュージアムトーク

1月

- 2日(水) 企画展「埼玉歴史街道I-『新編武蔵風土記稿』の世界-」オープン
- 5日(土) 企画展展示解説、博物館裏方探検隊
- 12日(土) 特別体験事業「十二単の着装体験」 企画展展示解説、博物館裏方探検隊
- 19日(土) 特別体験事業「鎧の着装体験」 企画展展示解説、博物館裏方探検隊
- 20日(日) ミュージアムトーク
- 26日(土) 特別体験事業「火起こし体験教室」 企画展展示解説、博物館裏方探検隊

2月

- 2日(土) 企画展展示解説、博物館裏方探検隊
- 9日(土) 企画展展示解説、博物館裏方探検隊
- 11日(月・祝) 企画展「埼玉歴史街道I-『新編武蔵風土記稿』の世界-」最終日
- 14日(木)・21(木) 特別体験メニュー「江戸組紐帯締め作り」
- 16日(土) 博物館裏方探検隊
- 17日(日) ミュージアムトーク
- 23日(土) 博物館裏方探検隊

博物館への資料寄贈をお考えの方へ

まずお電話で御一報ください。

TEL:048-645-8171(資料調査・活用担当)

詳しくはホームページをご覧ください。

http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/?page_id=261



■ 交通機関
東武野田線・大宮公園駅下車徒歩5分

埼玉県立

歴史と民俗の博物館

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore (編集発行)

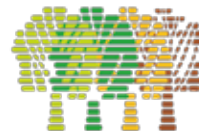
〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地

TEL. 048-641-0890 (管理)

048-645-8171 (学芸)

FAX. 048-640-1964

<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより

Vol.7-2(通巻)第20号

2012年9月11日発行